

目次(2) コラム・質問箱目次

コラム

タは開始も表す？	22
モシの構造形式	90
条件文実例構造図示	92
感覚的に自然な文法か、理性の承認する文法か	148
実体の下位分類	277
前や後ろが見えないときは	278
「構造伝達文法」研究者の驚き	344

質問箱

主格3種類、12機能主格、ヲは自動詞にも、古代はヲも主格？	20
音便化ある・なし、例外、タは開始も、雨降つとる、テの歴史	28
確実性、バ、前件12種類、タラはなぜ条件、バ・タラ4要素	106
絶対・相対テンス、従文に絶対テンスも、修飾7種類テンス	122
従文・主文の時間的関係、モデル化、表、状態性出来事の場合	133
テンス的分化、出来事形容詞、形容詞従文・主文、表、誤用	174
修飾4通り、実体修飾、修飾節内テンス、接続力、ヨリ格定義	202
構造形成6力、若さモデル化、基形成7力、みかけ語、多義文	240

タは開始も表す？

タが「開始」を表す、と言うとびっくりする人がいる。走つタ、疲れタ、寝タ……みな「完了」でしょ、と言う。そこで、

①「子どもが寝タ。静かになった。」

は完了ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。では、

②「子どもが寝テイル。」

は完了後の結果の状態ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。

では、子どもが起きたときに

③「よく寝タね。」

と言うことがあります、これは何ですか。やはり完了ですか、と聞くと、そうだ、と答えてくれる。

では、「寝る」出来事は2回完了するのですか、と聞くと、そういう、と答えてくれる。初めの寝タ(①)は「開始」の完了を表し、後の寝タ(③)は「終了」の完了を表すのだ、と答えてくれる。

では、「開始」を表すタもあるのですね、と聞くと、そういうことになる、と答えてくれる。じゃあ、なぜびっくりしたのですか……。

* * * *

本文法では、こう考えている。「タ」は絶対・相対の両テンスにおいて左上向きの矢印「↖」で示される。一つひとつの出来事には「開始・進行中(区切り)・完了・結果状態継続中(区切り)・結果状態消滅・記憶継続中／出来事まるごと(非アスペクト)」というアスペクトがある。タの矢印は過去・以前にある出来事のある一つのアスペクトを選んで指し示すのであるから、当然「開始」を選んで指し示すこともある(ただし、開始後のアスペクト[7]として)。その場合にタが過去ないし以前の「開始」を表すことになるわけである。詳しくはA4章参照。

なお、タラ(バ)は、図A6-14において100%のところに限定されているが、これはバとの対比という視点から見ての結果であって、タラ(バ)のみに着目すれば、どの領域でも使用可能という図になる。その場合、50%，0%の領域ではバと重なることになる。バとの違いは具体性・実現性(・意外性)の強さにあるといえる(A8章)。

バは『文法』(5.2 表5-6)では「仮定描写詞」と名付けたが、以上から明らかなように、構造的には「条件基」と呼ぶ方がより適切であるだろう。

モシの構造形式

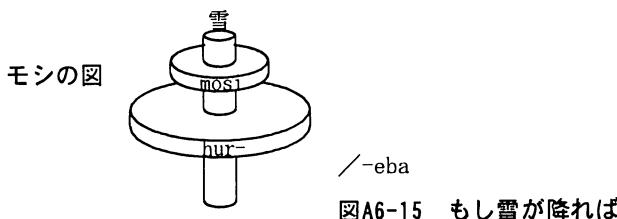
「もし」について『岩波古語辞典』にこうある。

モは助詞モと同根か。不確定・不確実の意を表す。シは
シク活用形容詞の終止形語尾に同じ。

さらに、「もしくは」の項にこうある。

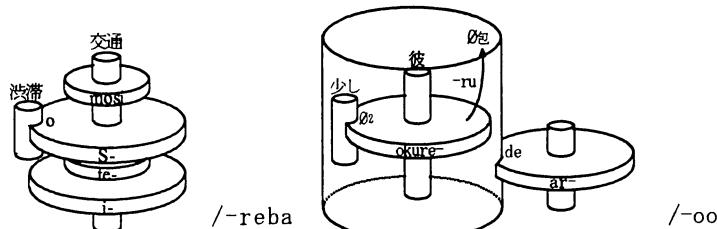
モシを活用させた連用形モシクと助詞ハとの複合
つまり、モシは不完全ながらも、形容詞「悲し」と似た構造を持つ
ようである。それで、モシを属性の一種として扱うことにする。ただ、
これは形容属性ではなく、化石化してしまった特殊な属性である。

このモシは、その主体と属性の結合が不確実なものであるという意味を示す機能がある(A7.3②も参照)。構造図は簡単に下図のようにしておく(本来は図A6-7、図A6-8 の包含実体の中)。



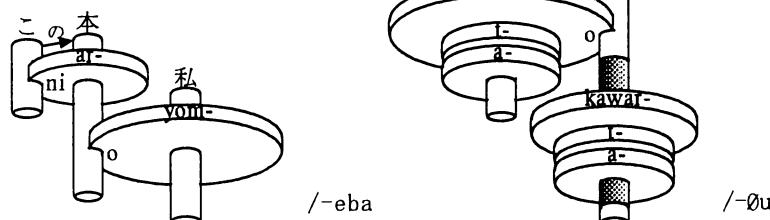
条件文実例構造図示

[現在不確定前件]



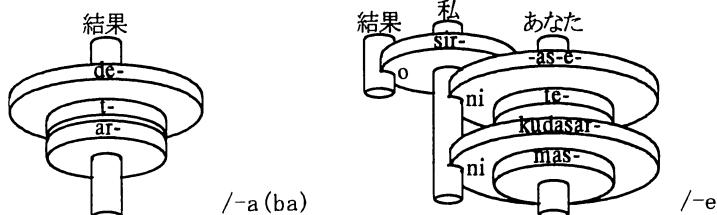
図A6-16 もし渋滞していれば、彼は少し遅れるだろう。

[過去非実現前件]



図A6-17 この本を読めば、私の人生は変わった。

[未来確定・不確定前件]



図A6-18 結果が出たら(ば)知らせてください。

タラ(バ)についてはA8章参照
～テクダサイについては『文法』37.7, 39.7②

感覚的に自然な文法か、理性の承認する文法か

「日本語構造伝達文法」は「形態素」のレベルで判断構造をとらえて表層の文現象の諸問題を解明しようとする説明文法である。この文法を理解するためには形態素についての理解が不可欠である。

「形態素」は意味を持つ最小の単位体であり、言語の体系を考えようとするときには基本中の基本の、非常に重要な要素である。ところが日本人の場合、自然な音声感覚の最小単位が a, ki, su, te, no のような「拍」だから、どうしても形態素を認識することが苦手である。

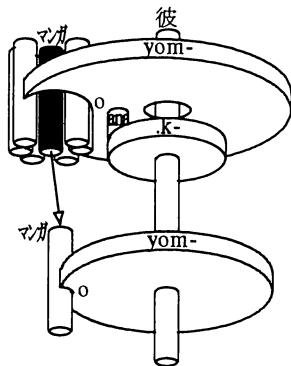
例えば、「学生ダ」というときのダは2つ(正確には3つ)の形態素、d と a からできていて、d は de の格を表し、a は ar- と同じく存在を表している、と説明しても、ふつうはばかげていると受け取られる。拍であるダを分解するなどということ、ましてや单一音素(d や a)が意味を持つなどということは思いもよらないことなのである。

また、形態素を理解していたとしても、nom-i=mas- の -i が2つの属性を結ぶ機能を持つ形態素であることを知らないと、nom-imas- と分析してしまう。形態素は意味・機能を正しく把握する必要がある。

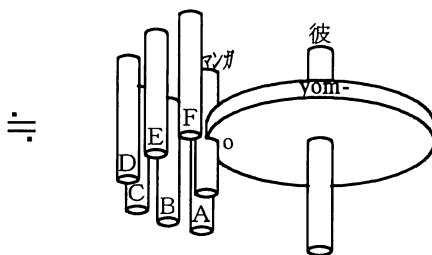
慣れないうちは、「あしたは晴れるだろう」のダロウ(-d=ar-oo)の中にデの格が入っているなどと言われても、とても信じられないかもしない。これは、水が酸素と水素の化合物だ、と言われても感覚的にはとても信じられないのと似ている。

感覚でとらえやすいのは表層文法である国語文法である。しかし、文法学者どうしでさえ感覚は同じではない。感覚を頼りにすることはできない。構造伝達文法では、感覚によってではなく、モノとしての形態素の機能の正しい分析・把握によって研究を進めたいと考えている。

感覚か、理性か。まだ21世紀。感覚に惑わされない勇気がいる。



図A19-18 マンガをしか読まない
(自実体排除)



図A19-19 マンガだけを読む
(他実体A～Fを排除)

実体の下位分類

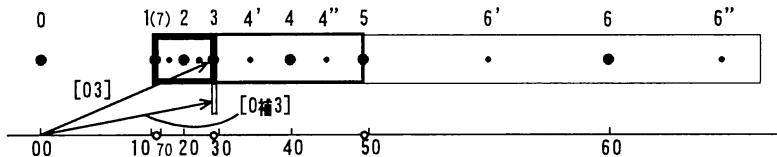
構造を作る3要素として「実体・属性・格」がある。属性や格がそれぞれに下位分類できるように、実体も5種類のものに下位分類できる。実体というのは、立体図では円柱(や包含円柱)で、簡略図では縦線(や縦長四角形)で示される、いわば名詞のようなものである。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ |
|---|---|---|---|---|

- ①格無制限実体(どの格にでも置ける実体。④が可能なものもある。)
- ②格制限実体(いくつか置けない格がある実体。④でもあります。)
- ③格限定実体(to, ni, 02格/de, ni格/to, 02格/to格/02格 等のよう
な特定の格にしか置けない実体。)
- ④形容実体(形容辞“.k-”との融合という形で使用。)
- ⑤否定実体(形容辞“.k-”と融合。動属性・態属性とは接合する。)

※このことについては改めて詳述する必要がある。

前や後ろが見えないときは

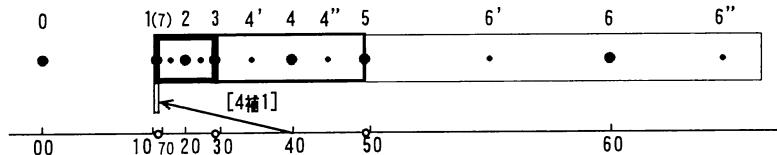


図A19-20 読み終える yom-i=oe-rū

※参考 終える(緒経る)…wōfe-rū → wō-ar-u wō- は「みかけの動詞(語幹)」

舟の後ろは前から見えないので、[03]をそのまま表現することはできない(*あした本を読んだ)。それで、絶対テンスでは未来完了を表すためには補助アスペクト(『文法』第15章)の「終える」等を使用しなければならない。図A19-20 のように、普通は幅を持たない「終える」という動属性を補つて「読み終える」のようにする。これなら「読む」の未来完了を「終える」の前からの描写によって表現できるようになる……「あした本を読み終える。」ここで補助アスペクトを補うことを言及線では [0補3] のように表すことにする。

過去開始も同様で、後ろから舟の前は見えないから [41] をそのまま表すことはできない(*きのう本を読む)。それで、図A19-21 のように、「始める」を補うことになる。



図A19-21 読み始めた yom-i=hazime-θ=t-θ=a(r)-θu

これなら「読む」の過去開始を「始める」の後ろからの描写で表現でき、「読み始めた」のようにタ形を使用して描写することができるようになる。(A10.1未来(2), A10.2過去(1), 『文法』15.1参照)

「構造伝達文法」研究者の驚き

「構造伝達文法」をやっていると、いろいろな驚きを経験する。

- ① ある日本語研究者に「こんなモデルが何の役に立つか」と聞かれてびっくりした。このモデルのおかげで、研究の初期段階で主格に3種類あることがはっきりし、至上の喜びがあった。この喜びはその研究者とは共有できていないのだと知った。そのほか、このモデルのおかげで日本語・言語というものに対する認識が深まっている。しかし、この喜びを分かち合うことのできる人はそう多くはないようだ。
- ② ある日本語研究者に述部の「形態素」レベルでの分析の必要性について尋ねたところ、意味はない、という答えだった。え？ どうして？ そんな答えが返ってくるとは夢にも思わなかつた私は、改めて自分が研究の「正統派」でないことを悟った。たしかに、ほとんどの日本語の研究書・啓蒙書では形態素は名詞について述べているにすぎない。
- ③ ある英語研究者に、現代日本語の文法を歴史的変化を確認しつつ研究している、と言ったところ、それは邪道だ、的なことを言われた。驚きはしたが、これには多少の心構えができていた。100年も昔の近代言語研究黎明期に通時言語学と共時言語学の峻別を説いたソシュールの主張を金科玉条としている研究者が日本に多いからである。しかし、このような研究者が多かつたおかげで、やるべきことがたくさん残っている。日本語の現代語の研究は歴史性を無視して行われてきたが、最近、例えば金水(2002)のようにそのような傾向に対する反省が表明されるようになった。日本語の各時代の共時態の研究は精緻なものになっているのだから、今こそその豊かな成果を現代語研究に取り込むべきであり、今ほど現代語の研究をするのにふさわしい時はない。現代語は一夜にして出現したわけではなく、長い歴史に培われているのだ。